

花信風法話

心に花をさかせよう

永観堂法主 中西玄禮

目次

1 恩送り (2010/6)	2
2 甲子園の夏 (2010/7)	2
3 良き出逢いが感動を生む (2010/8).....	3
4 拈華微笑 (ねんげ・みしょう) (2010/8 /13).....	4
5 越中八尾と永観律師 (2010/9/01)	4
6 月に想う (2010/10/01).....	5
7 共に是れ凡夫のみ (2010/11/01)	6
8 烏兎忽々 (うとそうそう) (2010/12/01).....	6
9 みかえりの心 (2011/1/05)	7
10 心に花を (2011/2/01)	8
11 花語らず (2011/3/01)	8
12 代受苦者 (2011/4/01).....	9
13 心遣いと思いやり (2011/5/02)	10
14 永観堂の悲田梅 (ひでんばい) (2011/6/01).....	11
15 「初心忘るべからず」 (2011/7/1).....	12
16 ひまわりの花 (2011/8/1).....	12
17 その命、私にください(2011/9/1).....	13
18 野の花のいのち (2011/10/1).....	14
19 幸せの在りか (2011/11/01).....	15
20 人生の暮れを染め上げる (2011/12/1)	16
21 辰の年に思う (2012/1/1)	16
22 泥かぶら (2012/2/1)	17
23 同悲する心 (2012/3/1).....	18
24 恨みを捨てよ (2012/4/1)	19
25 母心大悲 (2012/5/1)	19

1 恩送り (2010/6)

五月には「こどもの日」と「母の日」があり、六月には母の日に比べると多少影が薄いけれど「父の日」があり、家族の絆を深める月となっています。あなたの両親はご健在ですか。どうも親というものは、というより父親というものは、生きている間は鬱陶しくて煙たくて、うるさい存在のように思われがちです。けれど、父親の本当の愛情を肌で知るのは、その父が亡くなった後のことが多いようです。

高知県の35歳の女性が次のような文を書いています。(兵庫県加美町篇「ちょっとてれくさい 孝行のメッセージ」より)

「苦労して、やっとわかった親心。くそじじいはお不動さま。鬼ばばあは観音さま」

若い頃さんざん罵り続けた親だけれど、結婚して子どもができると、子育てや所帯の苦労を通して親の心に仏心を見ることができたのです。

また、ある男性は次のように歌います。

「子を連れて来し夜店にて愕然とわれを愛せし父を想へり」

夜店に来てはしゃいでいるわが子の姿に、ふと己が幼少の姿を重ねてみるのです。「そうか。おれもかつて父に連れてきてもらったことがあったなあ。いつも難しい顔をしていた父だが、今の俺も同じ顔なのか。父も私を愛してくれていたんだ」と、愕然とする程に思い知らされたというのです。

「仏説父母恩重経」には「父に慈恩あり」と説かれています。慈とは最高の友情という意味です。母親の悲しいまでに優しい愛情を受けた恩(悲恩)に対して、父親からは厳しい愛情を受けた恩があり、それを慈恩といわれるのです。無量寿経には「大悲風のごとし」と説かれています。父親の愛情も仏の慈悲に似て、いつも風のように私に呼びかけてくれる働きがあるのです。風の気配に、父親の男としての眼差しを感じるのです。では、両親が存在しなければどうすればいいか。

「恩送り」という言葉があります。直接に恩を受けた相手ではなく、別の誰かに恩を送っていくのです。親や祖父母から受けた恩を、子や孫に送る。先生や多くの人から受けた恩をボランティアという形で、学校や社会に奉仕する。これが「恩送り」です。なによりも大切な恩送りは、先祖から伝えられてきた、念仏にいかされ育まれてきた家風というものを、しっかり次の世代に送ることであると思います。

2 甲子園の夏 (2010/7)

今年もまた、高校野球の夏が巡ってきました。勝っても負けても一生懸命な、あの姿がいいですね。「ワールド大会の決勝に進出して日本中を熱中させたサッカー人気に比べて、やや下火になったといわれるものの、なお引き付けられる甲子園の魅力とはなんでしょう。

実は、私も甲子園経験者なのです。といっても選手ではなく、応援団長としてアルプススタンドで校旗を振り、三三七拍子を華麗に?…演じたリーダーでした。昭和33年第40回大会で、わが母校・姫路南高校は3回戦まで進出。残念ながら和歌山の海南に敗れましたが、灼熱の太陽の下でプレーするもの、応援するもの、グラウンドとスタンドが一体となり、そして燃え尽きたのです。

開会前は下馬評にも上がらなかった無名の公立校が、3回戦まで進出するのは、試合の流れにスリルがあって劇的に展開するからでしょう。グラウンドで繰り広げられるプレーの一つ一つに、少年たちの哀歓が交錯する光景。そこに大人達は、もはや戻れない少年時代への郷愁を感じるのです。

時代をこえて存在する甲子園の魅力。

その一つは、球児たちのひたむきさ。どんなに大差がついても、球を投げ、打ち、追いかけて、最後まで全力を尽くす姿に観衆は惜しめない拍手を送ります。

二つは、汗と涙。猛暑の中を戦った選手たちの汗に感動を覚えます。9回を投げ抜いて敗戦投手になった若者の涙を、美しいと思います。

もう一つは、勝者よりも敗者をたたえ、いたわる観衆の心情。「また来いよ」の掛け声は、いつも敗者にあたたかい。若いという字は苦しいという字に似ている、という歌がありましたね。自分のやるべきこと、やると決めたことを、よくわきまえて、たとえどんなに辛く苦しくても、不平不満を言わないで、苦しみに耐えて黙々と実行する。これを釈尊は「我行精進・忍終不悔」（かぎょうしょうじん・にんじゅうふげ）と無量寿経に説かれています。

「わが行は精進して、忍びてついに悔いず」と読みます。

青春とは、燃えながら生きること。そこに後悔はないのです。

3 良き出逢いが感動を生む (2010/8)

夕焼けを見て感動したことがありますか。

児童文学者の椋鳩十さんが書かれた『人間出会いのすばらしさ』という本があります。その中に、椋さんが子どもの頃に読んだ「ハイジ」のことが書いてあります。

アルプスの少女ハイジが、お爺さんと一緒に夕焼けを眺めているのです。目の前にずーっと続いている三千メートルを越える山々の、万年雪を頂いた峰があって、片方にはお花畑もあります。そのアルプスの草原で夕焼けを眺めていたハイジが尋ねます。

「おじいさん。夕焼けはなぜ、こんなに美しいの？」

すると、おじいさんが言います。

「夕焼けはな、おてんとうさんが山にむかってする、さよならのあいさつなんだよ。だからこんなに美しいのさ」

この言葉が椋さんの胸に焼きつくのです。目の前には日本アルプスの山々の本物の夕焼けがあります。茜色に染まった山々が、ことのほか美しく椋さんの胸に焼きついたのです。

椋さんは、お爺さんやお母さんの話をわくわくしながら聴いて育ったといいます。その体験から、母親が子どもに本を読んで聞かせたり、あるいは語って聞かせることが、子どもの成長の上でどんなに大切であるかを、この本の中で述べられています。そして「感動との出会いは、その人間の運命にかかわる」とも書いてあります。

仏教では、感動する心を「柔軟心（にゅうなんしん）」といいます。文字通り「やわらかい心」です。

本物に出会い、良き本に出会い、良き人に出会う。そこに感動が生まれるのです。毎月、永観堂幼稚園で園児たちに童話を話しています。心をこめて語れば、3歳児といえども心に

なにかを感じてくれる、と信じています。

「良き出逢いが、良き話が、感動を生む」
大事なことですね。

4 拈華微笑（ねんげ・みしょう）（2010/8/13）

八月六日から十日間、京都では新たな夏の風物詩として「京の七夕」が開催されました。世界遺産二条城をメイン会場に、堀川・鴨川の二つの川のほか、市内各地で七夕にふさわしい催しが繰り広げられ、京の夜を彩るのです。

二条城内の南庭園では、イベントの一つとして「メッセージ行灯」が20基並べられました。

2メートルを越す大型行灯には、京ゆかりの著名な方々が書いたメッセージが展示されています。東儀秀樹・千玄室・瀬戸内寂聴・里見浩太郎などの著名な方々に混じって、不肖私の「拈華微笑」と書いた文字も行灯となって参加しているのです。

釈尊がある日説法される前に、一枝の花を手にとって無言で聴衆の前に示します。弟子たちは意味がわからず一瞬しんと静まったとき、弟子の一人の摩訶迦葉だけが意味を理解してにっこり微笑んだのです。その時釈尊は

「文字に頼らず、教を伝える方法にもよらず、微妙の法門を摩訶迦葉に与えよう」と言われました。釈尊のころから摩訶迦葉のころへ、仏法の真理が「以心伝心」したのです。この故事を「拈華微笑」といいます。拈華とは、花を手を持つこと。ただ黙って花を示されたのを見て、なぜ摩訶迦葉だけが微笑んだのでしょうか。

咲く、という字は「わらう」とも読みます。花が咲くのをみて花が笑っていると受け止めると、人は自然に花に向かって微笑むのです。

「花は咲く / だれが見ていなくても / 花のいのちを美しく咲くために /
人は人であるそのために / 生きているのかしら」

高田敏子さんの詩です。人が人であるために、私たちは真剣に生きているのでしょうか。人間としての向上を目指すために、人生を明るく肯定して生きる。そこにおのずと「微笑」が浮かんでくるのです。微笑みのある人生、でありたいですね。

5 越中八尾と永観律師（2010/9/01）

9月1日から三日間、越中八尾の風の盆。立春から数えて二百十日に行われるこの行事は、収穫を目前にした稲が台風などの被害を受けないように、という祈りを込めた祭りです。哀調を帯びた胡弓の独特の音色と、編み笠を着けた男女の情緒ある踊りは、高橋治の小説『風の盆恋歌』と、石川さゆりの歌で一躍有名になりました。

この八尾の町には、風の盆とは別に毎年5月3日に曳山祭が行われます。三味線、太鼓の奏でる囃子につれて、若者たちが揃いの法被姿で六基の「山」を勇壮に曳きます。豪華な彫刻と漆や金箔で飾られていて、京都の祇園祭の山鉾に似ています。この山を曳く時の掛け声が「ホーリキミツツノヨーカンボー」というのです。漢字に当てれば「法力密意乃永観房」となります。以前、八尾の郷土史家の成瀬昌示氏が禅林寺に来られた時、八尾と永観律師の

関連を尋ねられたのですが、残念ながら答えは見つからないまま、成瀬先生も逝去されました。

ご承知のように、永観（ようかん、が正しい読みです）は禅林寺の第7世で、一日六万遍の念仏を修していた時、須弥檀上のご本尊が降りて共に念仏行道されるのを見て、驚き躊躇していると、仏が振り返り「永観、遅し」と告げられたという奇瑞の「みかえり阿弥陀」の縁起があります。のみならず、病人を助け励まし、獄舎にいる者には念仏を勧めて懺悔させ、境内の梅の実を惜しみなく貧しい者に分け与え、弱者救済に尽くした人です。一日六万遍の念仏を唱えるうちに舌も喉も枯れて声を失うほどの苛烈な念仏行を修した清僧でしたから、多くの人々から崇拜敬慕され、「法力密意の勝れた永観房」と讃えられ、それがいつしか越中八尾まで伝わったのであろうと察せられます。西方浄土にいます永観律師は、京から遠く離れた越中八尾の町の若者たちが声を限りに「ヨーカンボー」と叫ぶ声を、いかにお聞きでありますでしょうか。

永観律師が示寂されて今年は900回忌に当たります。ご命日の11月2日には百僧法要を営みます。百人の僧侶が読経念仏して律師を讃える声を、「永観房」はいかにお聞き届けになるでしょうか。

6 月に想う (2010/10/01)

秋は月の美しい季節です。幸いにも、今年の9月22日の十五夜の月は、永観堂の境内で見ました。多宝塔の上に輝く月を、放生池の橋に腰掛けて眺めるという優雅でぜいたくな月見でした。

月にちなんだ歌を一つ紹介しましょう。

「おおてらの まろきはしらの つきかげを つちにふみつつ ものをこそおもえ」
秋艸道人・会津八一氏の歌です。大和の唐招提寺を歌った見事な歌ですね。ある本に「唐招提寺の月は、金堂の東の方から昇ってくる。戒壇のある小高い土地に立って、はるかに金堂の方を眺めると、金堂の東の方からオレンジ色の月が昇ってくる。それはまるで別世界の景色を見るような異常な美しさである。」と書かれています。

おおてらのまろきはしら、というのはもちろん、唐招提寺の金堂の前に、横一列にずらりと並んでいるエンタシス型の八本の丸い柱を指しています。ご承知のように、この寺は唐の国から来た鑑真和上によって建てられました。金堂の前に横一列に丸い柱を建て並べるといふ建築様式は、明らかにギリシャ神殿に見られる様式です。ギリシャ・ローマを中心とする地中海文明は、会津八一氏がもっとも心惹かれていたといわれています。この短い歌には、ヨーロッパの文化や地中海文明だけでなく、授戒の師を求めて命を賭して唐へ和上を迎えにいった普照・栄叡の二人の若い僧、来朝までに五度も渡海に失敗し、来日できた時は失明していた鑑真和上。そういうさまざまなことを、秋艸道人は月に照らされた柱の影を踏みながら考えていたのです。「仏法のためなり。なんぞ命を惜しまん」と固い決意で身命を顧みず渡来した熱意に、道人も深く心に感ずるものがあったのだと思います。

今月25日、宗派の全国寺庭婦人の方々と唐招提寺にお参りします。十三夜は過ぎていますし、夜まで滞在できないので、金堂の月を見ることができないのは残念です。しかし、長

い年月をかけて解体復元された金堂にお参りし、丸い柱に手を触れてみるのも楽しみです、
 なによりも開山堂の鑑真和上のお像に詣でることができれば有難いことです。

7 共に是れ凡夫のみ (2010/11/01)

ある中学校に赴任したばかりの校長先生が、通りすがりに畑でイチゴを盗む生徒を二人見つけたのです。思わず傍によって声を掛けました。「おい！俺も仲間に入れろ」

驚いて走り去ろうとする生徒を「逃げるな！」と止めて、一緒にイチゴをとり始めました。「見つかったらどうしよう」ドキドキしながら、「おい、蔓を引張るな。爪でもぐんだぞ。もっと背を低くしろ！」などと校長自身が泥棒の指導をしているのです。

案の定、畑の持ち主に見つかりました。「にげろ！」三人は三方に散って走り、何とか逃げおおせましたが、翌日、校長先生は相応のお金を差し出して、持ち主に深々と頭を下げていいました。「泥棒は私でした」。

このことが広まりましたが、校長先生は頑として生徒の名を明かしませんでした。けれど担任の先生にはわかっていたのです。それ以来、札付きのワル二人が眼に見えて明るく、生き生きとしてきたからです。

皆に熱望されて赴任したその中学は、県下でも三大暴力校といわれるほどの学校であったそうです。けれど、新任の校長は、そんな暴力に屈しなかったのですね。行いの悪い子、成績のよくない生徒を特に眼を掛け、叱る時は本気で叱り、鍛えるときは本気で鍛える。特に他人への愛、全力投球、損得を考えない、などを繰り返して語り、スポーツに力を入れて、気がついたらいつの間にか暴力は学校から完全に消えていた、というのです。

以前、新聞で読んだ記事ですが、あなたはどのように受け止められますか。

「我、必ずしも聖にあらず、彼、必ずしも愚にあらず。ともに是れ凡夫のみ」

聖徳太子のことばです。これが教育の原点なのですね。

口うるさく説教してみても効果は少ないのです。親や教師が人間として、大人として「共に凡夫」の自覚を持ちがんばっている姿が、生徒たちに人生を教えることになるのですね。もちろん、僧侶にとっても大切な教えであることは、言うまでもありません。

8 烏兎忽々（うとそうそう）(2010/12/01)

河の流れにも似て、月日にも澱みがありません。早くも師走となって、カレンダーも残り一枚になりました。神社の中には来年の干支のウサギの大きな絵馬を、本殿の前に掲げた所もあります。

兎といえば、月日のたつことの早いさまを「烏兎忽々」といいます。太陽の中には三本足の烏が、月の中には兎が住むという言い伝えがあり、日月の流れに特別な感情を抱いた言葉です。忽々とは、あわただしい・忙しい、という意味があります。

唐代の善導大師は、「人間、忽々と衆務を営み、年命の日夜に去りゆくを覺らず」と述べて、毎日をうかうかと過ごさず、若くて元気な間に本物の幸せを見つけよ、と警告しています。

ところで、西条八十の詩に「ある大晦日の夜の記憶」というのがあります。

「その夜は粉雪がふっていた。 / わたしは独り書斎の机に座って / 遠い除夜の鐘を聞いていた。

風の中に断続するその寂しい音に聴き入るうちに / わたしはいつかうたた寝をしたように思った。 / と、誰かが背後からそっと羽織を着せてくれた。

わたしは眼をひらいた。 / と、そこには誰もいなかった。 / 羽織だと思ったのは静かにわたしの身に積もった一つの歳の重みであった。 」

一つ歳をとった重み。羽織一枚の重み、それはなにか計量器で計れるというものではないのです。心の底にそっと、しかし、普通の重みとは異なる重量感を感じさせます。私にとっても、今年は特別に重みのある一年でした。羽織一枚ではなく、衣一枚の重みです。衣の色が変わるだけで立場と環境が激変し、その責任感と緊張感の重みに耐える一年でした。

その上、さまざまな悲しい別れがありました。そして、新しい出会いもありました。人はみな、別れと出会いを繰り返し生きていくのです。この重みを心の奥にしまいこんで、新しい年の活力としたいですね。

あなたの今年一年の歩みは、どのようなものであったでしょうか。二度とない人生。自分にしかない人生。であるからこそ、確実に、おおらかに歩み続けなければなりませんね。この年の重みを受け止めて、前向きに新年を迎えることにいたしましょう。

9 みかえりの心 (2011/1/05)

新しい年の初めに、永観堂の本尊・みかえり阿弥陀仏の尊前に、この一年の天下和順と兵戈無用の平和な世界実現と、国富民安を祈念いたします。

天下和順 (てんげわじゅん)・世の中が和やかで穏やかであること。

兵戈無用 (ひょうがむよう)・軍隊や武器を用いることなく、平和であること。

国富民安 (こくふみんなん)・国が豊かになり、人々が安らかであること。

いずれも無量寿経の中の言葉で、仏教が広まることにより、平和な世の中が実現されると説かれており、毎朝、勤行の中で唱えているのです。

永観堂の本尊は世界でも珍しく、立ち止まり振り返る姿です。仏が立ち止まり、振り返り、待つという「見返る」姿は、現代人に深い慈悲の働きを示しています。

一つに、自らを顧みよ、との教え。

二つに、遅れる者、生きる勇気や希望を失くした者、孤独に泣くものに手を差しのべ、立ち上がり前に進もうとする者を待つ姿勢。

三つに、今の日本が棄てさった美德や価値を見直し、再び生かそうという心。

この慈悲の働きを実現するために、仏は「あきず・あせらず・あきらめず」待ち続けているのです。

あわただしい生活を改め、美しい日本の四季の移ろいを味わい、先祖を敬い、篤い信仰心を持ち、老いてもなお凜とした心で生きようという、スローライフ (ゆったり生活) を取り戻さねばなりません。人々の生活や心の中のゆとり喪失が、引きこもりや過労死や自殺を生み出しているのです。

政治や経済、社会が閉塞し、不透明な今こそ「あきず・あせらず・あきらめず」という『みかえりの心』が必要ではないでしょうか。

10 心に花を (2011/2/01)

2月4日は立春。暦の上では春ですが、北国は豪雪の中。光の春の到来が待たれます。1月の小寒から4月の穀雨の頃にかけて吹く風を、「花信風」といいます。中国では、虫はそれぞれの季節に生まれ、そして死んでいくけれど、それは季節の風が虫の命を動かし育てる、と考えられていました。虫だけでなく、風は草木の命をも呼び覚まして、それぞれの季節に花を咲かせます。小寒には梅・椿・水仙を。立春には黄梅や桜桃（ゆすら）を「春だよ。起きなさいよ」と風が吹いて起こすのです。

花信風は季節の風、というだけではありません。今、人生の冬の中において、生きる勇気をなくしかけている人、悲しみや苦しみを抱えている人の心の中に、誰かのなにげない一言が、仕草や笑顔が、勇気や希望を与えることがあります。それこそ、心の花を咲かせる「花信風」なのです。

「夜回り先生」こと水谷修さんの講演を聞いたことがあります。自分の存在を学校や家庭で否定されたり、阻害されて夜の街を徘徊する少年少女たちに「早く帰れよ」とか、「人生の主演は君だよ」と声をかけておられるのです。世の中で誰一人、自分を必要としてくれないと思うと、「どうせ自分なんか」と自暴自棄になる少年たち。幼い時から、母親が後ろから見てくれている、と感じたり、「お母さんはあなたが必要なのよ」と抱きしめられることがあれば、自分は大切に思われているという存在感・重要感を自覚することでしょう。

「和顔愛語先意承問」と無量寿経に説かれています。

和顔（わけん） 明るい笑顔

愛語（あいご） 愛情のこもった言葉

先意承問（せんいじょうもん） 相手を思いやる心

これが花信風となって、人の心を育て豊かにするのです。

和尚の法話を「花信風法話」と名づけたのは、ささやかでも心の応援団になれば、という願いが込められているのです。

あなたも、周囲の人の心に、小さくてもいい、美しい花を咲かせる心地よい花信風を吹かせてみませんか。

11 花語らず (2011/3/01)

永観堂の「みかえり阿弥陀如来」を感得された永観律師は、一日に三万遍、時には六万遍の念仏を唱えられましたが、厚い念仏信仰の根底には「生来の虚弱な体質」という弱者の自覚を強く持っておられたようです。それだけに、病気や貧しさに生きる気力をなくしたり、罪を犯さざるをえなかった人々、いわゆる「社会的弱者」に向けるまなざしには大変暖かいものがありました。自らの念仏信仰を生涯つらぬき通しただけでなく、衆生救済にも命をかけた人です。

そのために、境内には「施薬院」を設けて病人を助け、梅の木を植えて実を惜しみなく人々

に分け与えました。人々は永観さんの徳を感じて「悲田梅（ひでんばい）」と名づけて今に及んでいます。悲田というのは、貧者や病人の苦しみを救う行為をいいます。

3月に入って寒さが少し和らいだせいでしょう、永観さんゆかりの白梅がやっと花開きました。

中国原産のバラ科の梅は、奈良時代前期、遣唐使によってわが国にもたらされ、万葉のころから「春告草」「香栄草（こうばえぐさ）」とも呼ばれて、人々に親しまれてきました。梅をうたった歌は多いのですが、とりわけ次の歌は趣が深いものがあります。

君ならで誰にか見せん梅の花 色をも香をもしる人ぞ知る （紀 友則）
 清楚な色と、ほのかな香りが身上の梅の花は、「君ならで」と思う人とともに味わうのが似つかわしいですね。

昨年二月、管長就任のご挨拶に南禅寺さんをお訪ねしたとき、方丈の廊下に「花語らず」という、いい詩が掲げてありました。かつて南禅寺管長を勤められた、故柴山全慶老師の作です。

花は黙って咲き / 黙って散ってゆく / そうして 再び枝に帰らない
 けれども その一時一處に / この世のすべてを托している
 一輪の花の声であり / 一枝の花の真である
 永遠に滅びぬ 生命のよろこびが / 悔いなくそこに輝いている

一輪の花にも、み仏のいのちが宿ります。

私たちに恵まれた、たった一つの尊いいのち。そのいのちの限りをつくし、いたわりあう心、己をふりかえる心、美しいものに感動する心、出会いに感謝する心を大切にしたいものです。そして、それが永観律師の感得された「みかえり」のころでもあるのです。

12 代受苦者 (2011/4/01)

「悲しみを抱えながら生きねばならぬ母親の叫びが聞こえる。親を亡くした震災遺児。孤独死の穴に落ちていくお年寄り。彼らも心に深手を負った人たちだ。『心のケア』はよく言われるが、傷ついている人への支援が十分に進んでいるとはいえないだろう」

この文は仙台に本社を持つ河北新報のコラムの一部です。ただしこの度の東北大震災の記事ではありません。これが書かれたのは1999年1月17日。阪神淡路大震災の4年後、神戸の復興に寄せた、いわばエールなのです。

2011年3月11日。仙台始め関東・東北地方が壊滅的な災害に襲われました。3月末現在、死者の数は11232人。宮城県だけでも6843人に及び、阪神大震災の死者の数を越えています。海に囲まれた火山列島日本に、いつ、どこで、どんな災害が起きても不思議ではないのですが、M9.0の巨大地震と二次災害である津波と、それに加えて原子力発電所の事故による放射能被害の三重苦なのです。

仏教では、自然災害による犠牲者を「代受苦者」といいます。自分の代わりに苦しみを受けて下さった人々、という意味です。

今回は地震の震源地が宮城県沖であったので、太平洋側の東北地方が主な被災地となった

のですが、これが京都花折断層や南海沖が震源地であれば、永観堂や網干の大覚寺も確実に被害を受けているでしょう。

私や家族が受けていたかもしれぬ苦しみを、今回、関東・東北地方の人々が代わって受けられた。そう思うと、人事ではすまされないのです。

今、自分になにができるか。宗派としてどう対処すればいいか。

本山の宗務所は、急遽、災害対策本部を立ち上げ、特別災害対策基金から救援金を支給し、同時に全国の末寺に対して義捐金の要請をしました。個人としても新聞社を通じて救援金を寄託いたしました。本山の受付で拝観にこられる方々に協力を呼びかけ、私の著書や色紙を買っていただいた浄財をすべて被災地に送ることにしています。

宗派の京都布教団の有志が、四条大橋に立って募金の活動を始めています。青年僧の会も現地に救援に行くことを検討しています。

そして今、永観堂では「加行」という、僧侶の資格を取るために 17 歳から 58 歳の 22 名の難僧が過酷な修行をしています。朝 4 時・昼 10 時・夕 4 時の三回、身を切るような寒さのなかで水をかぶり、その後 2 時間余りの時間、勤行に集中します。その時、代受苦者の冥福を祈り、被災者の早期復興を願って全員で念仏を唱え回向しているのです。

冒頭の新聞のコラムは、次の言葉で結ばれています。

「街の再建にはセメントや鉄を注ぎこめばいい。しかし、人生の再建にセメントは使えない。人生の再建に立ち向かわねばならぬ人たちの声に、耳を澄ませたい」

13 心遣いと思いやり(2011/5/02)

東日本大震災が起きてから、テレビの広告に毎日出てくる詩があります。

「こころ」はだれにも見えないけれど / 「こころづかい」は見える

「思い」は見えないけれど / 「おもいやり」はだれにでも見える

これは「行為の意味---青春前期のきみたちに----」という詩の一節で、宮澤章二さんの作品です。

世の中には、自分の力を信じないで愚痴ばかりいう人がいます。

「自分になにができるっていうんや。なあ、知れてるやろ。俺なんかより偉いやつは、いっぱいいるんや」

また、遠慮深いといえども聞こえがいいが、要するに引っ込み思案の人もいます。

確かに、一人の力は知れているかもしれませんが。だからといって、心に思いながらなにもしない、やろうと思うことをやらないでは、なにも生まれません。残るのは、後悔と無力な自分に対する怒りだけです。生まれつきの性格なんだから、と思いつんでしまっていること自体、すでに視野が狭いことになります。

思いは行動に移して初めて「思いやり」となって相手に伝わるのです。宮澤さんの詩は、次のように続きます。

あたたかい心が あたたかい行為になり / やさしい思いが やさしい行為になるとき
＜心＞も＜思い＞も初めて美しく生きる

-----それは 人が人として生きることだ

やってみれば反省も生まれます。自分は人として人に何を与えることができるか。物があれば物を、金があれば金を。力があれば力を。知恵があれば知恵を。救援金や救援物資の提供、瓦礫撤去の手伝い、チャリティイベント、さまざまなボランティアがあります。

被災地で苦しむ人々に笑顔が戻るように、自分に出来る「心遣い」はなにか。なにもなければ、せめて苦しみや悩みを受け止め、共に泣くことのできる「同悲」の心だけは持ち続けたいものですね。そこから、ささやかでも人に対する積極的な行為が生まれてくると思うのです。

14 永観堂の悲田梅（ひでんばい）(2011/6/01)

例年より十数日早い入梅となりました。梅の実が熟す時期に降る雨なので「梅雨」というのだそうです。梅雨にもいろいろ呼び名があって、激しく降ってサッとやむ雨を「男梅雨」、しとしとと長く振り続くのを「女梅雨」。集中豪雨になると「荒れ梅雨」とか「暴れ梅雨」といい、黴（かび）が生えやすくなるので「黴雨ばい」ともいうそうです。季節の移ろいを敏感に感じ取り、細やかな心配りをするのが昔からの日本人の美徳なのですが、このたびのような大きな災害にあうと、ショックが大きすぎて心のゆとりもなくなるのでしょうか。

自坊の大覚寺の本堂の前に梅の古木があり、「今年は実がたくさん付いています。文字通り鈴なりですね」と家人が電話で報告してくれました。どうやら梅干に、梅酒に、と張り切っているようです。

紫蘇の働きで赤く染まった梅干には、解毒作用があるといえます。枝にも邪気を払う霊力がある、と昔から信じられていて、お墓や仏壇の開眼供養の儀式に香水（こうすい・抹香を混ぜた水）を振りまく撒杖（さんじょう）も梅の南側に伸びた枝を使います。

大法輪という仏教誌に、酒井大岳師が「梅の一生」という次の詩を紹介しておられました。「二月三月花盛り。鶯鳴いた春の日の、楽しいことも夢のうち。五月六月実がなれば、枝から振るい落とされて、何升何合計り売り。もとより酸っぱいこの体。塩につかって辛くなり紫蘇に漬かって赤くなり、七月八月暑いころ、三日三晩の土用干し。思えばつらいことばかり。これも世のため人のため。皺はよっても若い気で、小さな君らの仲間入り。運動会にもついていく。まして戦（いくさ）のその時は、なくてはならぬこの体」

梅を人の一生になぞらえてユーモアを交えた楽しい歌ですね。昔、梅干は戦陣の必需品でした。

本山禅林寺の第7世・永観律師は、弱者救済に命をかけた人でした。境内に薬草を植えて薬王院を造り病人を収容看護したり、梅を育てて実を健康食として貧者や病人に惜しげもなく分け与えた、といわれています。この永観律師の慈悲の行為を讃えて、京の庶民は禅林寺を「永観堂」と親しみを込めて呼び、律師の植えた梅を「悲田梅」と敬意を込めて呼び伝えました。悲田とは、苦難を受けている人への思いやりの心。

そして900年後、何代か植え代わって、今もなお悲田梅は花を咲かせ、実をころころ落と

しています。梅の實の熟するうるおいの中で、甘酸っぱい香りとともに人を思いやる心の大切さを、私たちに伝えるように。

15 「初心忘るべからず」(2011/7/1)

六月の初め、久しぶりに平安神宮での薪能に出かけました。62回を重ねるこの日、「養老」「自然居士」「井筒」「石橋」の能4演目に、狂言「金津」が上演されました。夕焼け空と朱色の社殿を背景に始まり、途中で篝火へ火入れ式があり雰囲気は最高潮。「命には終りあり。能には果てあるべからず」という世阿弥の言葉を思い出しながら、幽玄の世界を堪能したのです。世阿弥の著で、わが国最高の芸術論である「風姿花伝」は、人生論としても勝れた内容を持っています。この中に「初心忘るべからず」という有名な言葉があり、初心には三種あることが具体的に述べられています。

(1) 是非初心忘るべからず

能楽を習い始める7歳のころは、良い（是）と褒められても悪い（非）と注意されても嬉しく上達していくが、あまりひどく叱るとやる気をなくしてしまう。これを「是非初心」といっています。

(2) 時々の初心忘るべからず

24,5歳の青年期は大事な時で、若盛りの一時的な「花」があって名人に勝るところもあるが、これを上手だとうぬぼれると当人にとって害になる。この時期に必要なのが「時々の初心」なのです。

(3) 老後の初心忘るべからず

44,5歳を過ぎると、外見の華やかさは薄れていくけれど、熟練の年とともに失わない「花」があれば、それこそ「真の花」である。この時期に「老後の初心」が大切なのです。特に70歳になる私には、この「老後の初心」が心に響きます。老人と呼ばれるようになると、体や顔つきが年寄り臭くなって醜くなるのは仕方ないとしても、せめて心まで醜くならないように心がけたいものです。初心に帰ることがいかに大切かを、この言葉から学ぶことができます。

いつも生き生きとして情熱に燃えて生きている人。いつも朗らかで側にいる人まで明るく生き生きさせる人。その人に接するとこちらにも熱い心が伝わってくる人。こういう人は幾つになっても「初々しさ」を持ち続けている人です。いつも人の幸せを願いながら努力する人を「菩薩」といいます。菩薩は永遠に若いのです。

せめて若々しく情熱に溢れた人生を、歩みたいものですね。

16 ひまわりの花 (2011/8/1)

真夏の太陽の下、東日本大震災の被災地でひまわりの花が咲いている景色をテレビで見ました。ひまわりが多くの人々を元気づけているようです。向日葵と書くひまわりは、北アメリカが原産で、300年ほど前に日本に伝えられた花だということですが、今ではすっかり日本の夏の風土に定着しています。花言葉は「あこがれ」「熱愛」「愛慕」「光輝」。そういえば、日本の気象衛星にも、この花の名がつけられていましたね。

ひまわり、といえは私と同世代の女性なら懐かしく思い出される雑誌がありますね。昭和二十年代に少女たちに熱狂的に読まれた雑誌、『それいゆ』『ひまわり』。昭和21年、戦後の退廃した世相の中で、女性に夢と希望を与え、賢く美しい少女であってほしいという熱意で、中原淳一さんが創刊したものです。なにもない時代だったからこそ、少女たちは大輪の花「ひまわり」に夢と憧れを求めたのでしょう。大きな瞳をした少女のイラストやスタイル画で、戦前から人気の高かった中原さんが表紙を描いて、川端康成・吉屋信子などのそうそうたる顔ぶれが執筆していました。

洋服の着こなしから、人間としての生き方の問題まで、中原さんが説いたのは、「少女には少女にふさわしいやり方がある」ということのようにでした。私と同世代の知人女性の何人かは、少女時代に『それいゆ』に出会い、雑誌からかもし出される美しい世界に触れた喜びを熱っぽく語り始めたら止まらない人がいます。最近、復刻版が発行されて人気をよんでいると聞いています。

その中原淳一さんの言葉を雑誌で見つけました。

「もし、この世の中に風に揺れる花がなかったら、人の心はもっともっと荒んでいたかもしれない。

もし、この世の中に信じることがなかったら、一日として安心してられない。

もし、この世の中に思いやりがなかったら、淋しくて、とても生きてはいられない。

もし、この世の中に愛する心がなかったら、人間は誰もが孤独です」

少女の時代に美しいものに触れ、夢を求めた人は幸せですね。

風に揺れる花や、美しい夕焼けに感動する心があり、人を信じる心と、思いやりの心と、そして愛する心を失わなければ、人は決して孤独にはならないのです。

被災地に花を。少年や少女たちに、夢と希望と未来を信じる心を。

17 その命、私にください(2011/9/1)

中学の校長をしておられた柴山一郎先生が、次のような話を紹介しておられます。

当時、その中学に鈴木千代子という生徒がいました。2年生の時、ブラスバンドの練習中に突然倒れ、搬入された病院で「膠原病」と診断され、余命2年の宣告を受けたのです。それでも千代子さんはめげることなく、高校受験に挑戦し入学を果たしたものの、入退院の繰り返しでした。倒れるたびに死の恐怖と向き合いながら、懸命に生きたのです。その頃のことを千代子さんのお母さんが、日記に綴っています。

「この七年間、いろいろなことがあった。学校で激痛がきて授業をこわしたこと。四年目の高校卒業、そして大学受験と予備校通い。千代子は最後まで病気の克服と自立をあきらめなかった。成人式には振袖を着て出席し、旅行にも行き、ジャズダンスもなった。死の影などみじんも見せない娘だった。発病の日から二千五百余日を数えたのである」

二年生存のはずが、彼女の気力で七年に延びたのです。それにしても21年の生涯は、あまりにも短かすぎます。迫り来る死を見つめながら、彼女は次のような文を書いています。

「自殺なんかなぜするの。私はテレビに向かって叫んだ。孤独だったというけれど、体が丈

夫なら毎日学校へ行けるんだし、クラスの中には一人くらいお友達がいたはずよ。せっかく生まれてきた大切な命を自ら捨てるなら、その命、私にください」

この叫びを残して、千代子さんは逝きました。自宅の庭には「千代子菩薩」と彫られた高さ50cmの石像が立っているそうです。福祉の仕事につくのを見ても明るさを失わず、強く美しく生き抜いた少女の姿が、この石像には込められている、と柴山先生は書いておられます。与えられた命を、福祉という他人の幸せのために尽くす仕事につきたい、と願った千代子さんは、まさに菩薩というにふさわしい生き方だったのです。

浄土宗西山派の派祖・証空上人は

「衆生の重んずるところ、命に過ぎたるはなし」

と述べられています。人がもっとも大切にしなければならないもの、それは命に他ならない。命以上のものはない、といわれるのです。この一日は大切にすべき一日です。この一瞬の命は尊ぶべき命です。一つしかない命だから、二度とない人生だから、この一日を大切に生きねばなりません、

と千代子菩薩が呼びかけています。

18 野の花のいのち (2011/10/1)

秋の七草を全部いえますか？「ハスキーなおふく」と覚えておくといいいのです。ハギ・ススキ・キキョウ・ナデシコ・オミナエシ・フジバカマ・クズ。古来、ハギ（萩）は七草の筆頭に挙げられ、つつましく、控えめな花の姿が日本人に好まれて、歌にも多く詠まれています。一つだけ選ぶなら「秋萩の花咲く頃は来てみませ 命またくば共にかざさむ」という良寛さんの歌が好きです。

「行き行きて倒れ伏すとも萩の原」

これは松尾芭蕉とともに奥の細道を旅した弟子の曾良の句です。旅の途中で病に倒れた曾良は、一人別れて帰ることになりました。「師匠の供をできぬ悔しさ。江戸へ戻る旅の途中、行き倒れて死ぬかもしれぬ悲しさ。しかし、自分もまた風雅を愛する者として同じ死ぬなら、萩の花の咲きみだれる野原で死にたい。」そんな曾良の痛切な思いが感じられる句です。

萩や桔梗に並んで、最近はナデシコも有名になりました。七草のほかにも彼岸花、水引、吾亦紅、コスモス、蓼（たで）、アカマンマなど、秋の野の花には可愛い草があります。道端に雑念と生えている雑草も、思い思いの色や形の花を咲かせています。昭和天皇が、かつて「雑草という名前は少し侮辱的な感じがして好まない」と語られたそうですが、生物学者として、懸命に可憐な花を咲かせる野の草の生命力に感動された御心境なのでしょう。確かに十把ひとからげに雑草といっても、その一本一本にはきちんと名前がついています。

「草の花ひたすら咲いて見せにけり」久保田万太郎。

野の草花も皆「いのち」を与えられて、懸命に生きているのです。

「いのち」という讃仏歌があります。

野の花の小さいいのちにも 仏は宿る

朝かげとともに来て つつましい営みを与える 同じように

白露のはかないいのちにも 仏は宿る

月代（つきしろ）と共に来て 一夜さの安らぎを与える 同じように秋という季節がもたらす風光のためか、野の花といい、白露といい、月代といい、秋を詠った詩歌はどこか悲しみが感じられますね。善導大師は「華を採って水を与えず日中に置けば、たちまち色を失うだろう。人の命も同じだよ」と教えられています。与えられたいのちを精一杯、咲ききりたいものです。花のように。

19 幸せの在りか (2011/11/01)

「幸せ」というのは、一体なんでしょうね。

「それはね、他人の不幸を眺めることから生ずる、気持ちの良い感覚だよ」という、きわめ

て皮肉な言い方をする人がいます。裏を返せば、他人の幸せを見れば「妬み心」が生ずるということでしょう。これが人間の本性というなら、悲しいことですね。

永観堂の御影堂へ渡る廊下には毎月、季節感に満ちた美しい写真とともに「今月の言葉」が掲示されていて、ホームページにも載せられています。10月の言葉は「幸せは求めるものでなく、感じるものである」と書かれていました。カール・ブッセの詩のように、山のあなたの空遠くまで探し求めても、結局「涙さしくみ帰り来ぬ」ことになるのです。

不幸の体積なら涙の量ではかることができても、幸せの体積となると計る基準がありません。幸せを感じる心とは、ひろびろとしていて爽やかな気持ちでいることです。作家の田辺聖子さんは「自分を理解してくれる人のそばにいること」といっていますが、確かにこれも重要な要素といえます。幸せをテーマにした詩のなかに、茨木のり子さんの「答」という作品があります。

「ババさま、ババさま。

今までババさまが一番幸せだったのは、いつだった？」

来し方を振り返り、ゆっくり思い巡らすと思いきや、

祖母の答は間髪をいれず、だった。

「火鉢の周りに子どもたちを坐らせてね、

かき餅を焼いてやったとき」

間髪を入れずに、という表現に、ババさまの確信の強さがうかがえますね。一番幸せだったのは、子どもたちにかき餅を焼いてやった時だった。つまり、幸せというのは平凡な日常の中にあるのだ、といっているのです。

仏教の言葉に「無事是貴人」（ぶじこれきにん）という禅語があります。（臨濟録）無事である人こそが貴人である、という教えです。毎日の生活に慣れきってしまうと、それを成りたたせているもののお蔭を忘れて、生活に不満を抱くようになったり、人の幸せを妬んだり、愚痴をこぼしたりするようになります。

殊に今年の三月に発生した大地震によって、平凡な日常を奪われた東日本の人々の悲しみや苦しみに思いを致すとき、平凡の尊さを痛切に感じます。平凡の無事に感謝しなければ、バチがあたりますよ。

20 人生の暮れを染め上げる (2011/12/1)

「秋冬」という歌謡曲が30年ほど前に流行りましたね。「季節の変わり目を あなたの心で知るなんて もう恋も終わるのね」という切ない歌詞でした。秋から冬へと移る季節の変わり目が、近年ははっきりしませんね。地球温暖化の影響なのでしょう。11月下旬になっても小春日和が続いて、今年の永観堂の紅葉はかなり遅れました。が、師走に近づくにつれて、にわかに朝夕の冷え込みが本格化し、見事な紅葉の景色となりました。12月上旬までは十分楽しめそうです。

もみじに「紅葉」の文字を当てたのは平安時代からで、赤だけでなく黄葉ももみじと読んでいたようです。語源は色をもみ出す「揉み出」からきているという説があります。

春、芽生えたばかりの若葉。初夏、青嵐に吹かれて小さな花を咲かせ、やがて竹とんぼのような実を付ける青葉。盛夏、強烈な日の光を跳ね返して茂る壮葉。秋、赤や黄に自らを染め上げていく紅葉。冬、空中を舞いながら散っていく枯葉。それは、まるで人の一生を見るようです。

◆ うらを見せおもてを見せて散るもみじ

良寛さん74歳の時の句です。いよいよ臨終間近という時、歌の弟子であり純愛を貫いた貞心尼の求めに応じて与えた辞世の句です。

「貞心よ。お前にだけは私の表も裏も見せた。すべて見せた。そして安心して散っていくのだよ」

人間にとって自分の裏、つまり欠点も醜い部分も、すべて見せられる人を持つことは幸せですね。良寛さんにとって貞心尼は、そういう女性でした。

木の葉が落ちる前に美しく紅葉します。なぜこのように散るときが一番美しいのかといえば、太陽の光と熱に照らされ、平均気温が10度以下になると紅葉が始まります。葉の糖分から赤い色素が生成されて紅葉するのです。

◆ あみだぶに染むるころの色にいでば 秋の梢のたぐいならまし

これは法然上人のお歌です。阿弥陀仏の慈悲の光に照らされると、それぞれの個性がひととき美しく染められて、まるで秋の梢の紅葉のように輝いていますよ、という意味です。二度とない人生。せめて晩年は、より多くの人の幸せのために尽くそうとすれば、人は自分にしかない光を放ち、徳の香をただよわせることができます。

人生の暮れを、美しく飾りたいものですね。

21 辰の年に思う (2012/1/1)

新しき年の始めの初春の今日降る雪のいや重^しけ吉^よ事

大伴家持が因幡の国庁で詠んだもので、万葉集4516首の最後の歌です。年の始めに降る雪のように、良いことが積み重なることを願った歌です。特に昨年は、東日本大震災によって引き起こされた数々の不幸な出来事があったため、余計に難を転じて吉事が重なることを願わずにおれません。

私たち人間にとって幸せとはなにか、と問いかけられた時、あなたはへと答えますか。

作家の田辺聖子さんは「自分を理解してくれる人の傍にいたいことだ」と言っています。大切な家族のみならず、家も仕事も失い、仮設住宅で新年を迎えた東北の人々にとっては、素直に「おめでとう」といえる心境ではないでしょう。が、多くの日本人は被災された方々の悲しみを理解し、同悲の心で寄り添い支援を続けていこうとしているのです。

人は心の中に引いた線を、心を新たにして越えていくこともできます。絶え間ない時の流れを曆で区切って、元旦にけじめをつける習慣を伝えてくれた私たちの先祖の英知を素晴らしいと思うのです。この日、人は過去を振り返り、現在を見つめ、未来への夢を描く瞬間を持ちます。それは人生の句読点でもあるのです。

さて、明けて迎えた辰の年。辰は伸しんに通じ、すべてのものが動き伸びることをいいます。日が動き始めれば「あした晨」。手が動けば「ふるう振」。新しい生命を宿せば「みこもる娠」。言葉を発するのは「唇」。貝（金）が動けば「にぎわう賑」。言葉も行動も財産も、使い方によって人を幸福にも不幸にもします。

仏性という仏さまの生命を宿し、生かされているという自覚から、自然に手が動いて合掌。唇に念仏の一行を励めば、明日の幸せが約束されているのです。

そこで、新年にあたって次の言葉を贈ります。

「今日という日は、これからの人生の最初の日である」

私たちは悲しみや苦しみに出会ったり、仕事に失敗したりすると、くよくよとして心が迷います。そんな時、この言葉を胸にたたんで、新しい一日を歩いていきましょう。

22 泥かぶら (2012/2/1)

美しくありたい、と願うのは、なにも女性に限ったことではありません。年齢・性別に関係なく、誰もが持っている願望です。

かつて早稲田大学の教授であった会津八一先生（1881～1956）は、門弟の一人に宛てて書かれた手紙の中に、「美しき人になりたく候」という言葉を残しておられます。美しき人、とはどういう人か。

昔、ある村に身寄りがなく顔の醜い少女がいました。髪はそそげだち顔は泥まみれで、まるで泥のついた蕪のような顔なので村人から「泥かぶら」と呼ばれていました。時には邪魔だからと川になげこまれたり、子どもたちからも「汚い！ 臭い！」とつばをかけられたり、親なしっ子だと石を投げられたりしました。

ある時、泥かぶらは旅のお坊さんに「きれいになりたい！」と泣いて訴えました。その時、旅のお坊さんは、こうすれば美しくなれる、と三つのことを教えました。

「自分の醜さを恥じないこと。いつもにっこり笑うこと。人の身になって思うこと」

美しくなりたい一心で、彼女はいじめっ子の罪をかぶったり、病人のために危険を冒して薬を取りにいったりするうちに、人のために尽くす喜びを知りました。また、村人の泥かぶ

らを見る眼が、優しく変わってきました。こうして泥かぶらは、村人の心を明るくし、仏さまのように美しい少女になりました。

真山美保さん作の「泥かぶら」。この話はどの子どもも本来持っている美しい心や、人への思いやり、困難にも耐える強さは、どうすれば引きだされるかを教えています。

人は「生まれ」によらず、「どのように生きてきたか」「どういう出会いを重ねてきたか」という「生き方」によってそれぞれの「顔」が作られていく、といます。そして、自分が変わることによって周囲も変わっていくのです。

本当にいい顔というものは、年輪を重ね、人生経験を積み上げ、いくつになっても美しいものに感動する心と感謝の心によって作られるもののようですね。

23 同悲する心 (2012/3/1)

弥生三月。卒業・就職・転勤と、春は別れと出会いの季節です。遅れていた梅の花だよりも聞こえてくるけれど、もっと辛い別れを体験された多くの人のことを思うと、花に浮かれる気分にはなれません。

東日本大震災から一年が経過しました。津波で失われた多くの命にとって、一周忌を迎えます。春の彼岸が来ても、墓参りさえ出来ない被災者の多くの方々の心を思えば、ただ手を合わせ祈るばかりです。

3月11日の大震災発生以来、朝夕の勤行で一日も欠かさず亡くなられた方々の回向をしています。

仏教に「代受苦者」という言葉があります。本来は地藏さまのように自ら地獄に落ちて苦しむ人々を救う菩薩行をいうのですが、「自分が受けたかもしれぬ苦しみを、私に代わって受けられた人々」と位置づけて一年間、回向を続けてきました。

金子みすゞさんの詩を発見し世に出された童謡詩人・矢崎節夫先生は震災の三日後に永観堂の参詣され、たまたま私の語る法話の中の「代受苦者」という言葉に大変感銘を受けた、と述べられています。

「被災者という言葉には、他人事のような冷たさがあります。私に代わって苦を受けられた人という代受苦者には、他人事でない自分のこととして共に悲しむ心があります。これこそ『みすゞの詩の心』なのです」

過日、京都会館での講演会で矢崎先生は、多くの聴衆にそのように語られました。

『慈心相向』という言葉があります。「慈しみの心で相手と向き合おう」という意味で、善導大師の言葉です。この一年、被災地へ何度も赴き、涙しながらボランティア活動に取り組んだ若者たちが大勢います。この涙の中に、涙した者しかわからぬ尊いものがあります。これを「慈心」といい、「同悲心」ともいいます。自分の悲しみを通して他人の悲しみを知

る心です。

同悲するところが、人間愛の基本なのです。

24 恨みを捨てよ (2012/4/1)

四月八日はお釈迦さまの誕生日で、「花まつり」といいます。では、四月七日は何の日でしょう？

法然上人のお誕生の日です。長承2年、今から879年前に岡山県の美作でお生まれになりました。幼名は勢至丸。父は土地の豪族・漆間時国（うるまのときくに）といい、地方の治安を守る警察の機動隊長のような役人でした。が、都から派遣されてきた明石定明という豪族に襲われて、非業の最期を遂げます。勢至丸9歳の春でした。物陰から矢を放って相手に手傷を負わせましたが、一族郎党すべて討ち死にするという悲惨な結末でした。

今わの際に父は勢至丸に、こう言い残しました。

「仇を討ってはならぬ。お前が恨みを晴らせば、残された彼の子供もお前を怨みに思うだろう。仇討ちに果てしがたい。恨み心を捨てよ。出家して我が菩提を弔い、恨み心のない安らぎの心を手にいれよ」

この遺言が勢至丸の生涯に大きな影響を与えたのです。比叡山に登り、十五歳で出家して戒を受け、法然房源空と名乗りました。叡山では知恵第一、文殊菩薩の生まれ変わりといわれるような秀才でしたが、学問や知識を深めるほど、安らぎの道から遠ざかるため、苦しみは増すばかりでした。

九歳で一家に降りかかった夜討ちによって、いわば犯罪被害者となった法然上人は、以後24歳で保元の乱、27歳で平治の乱が興り、驕る平家の栄華と滅亡を目の当たりにするばかりでなく、戦乱のほかに飢饉、大火、地震、台風など時代が音をたてて崩れていくのを身をもって体験したのです。末法乱世の地獄のような苦しみに喘ぐ人々を見て、「安らぎの心」がどこにあるのか。

「かなしきかな、かなしきかな。いかがせん、いかがせん」 青年法然房の悲痛な叫びです。やがて43歳。ついに浄土門の教えを開きます。南無阿弥陀仏をひたすら称えれば、人は皆、安らぎの心を恵まれるという他力の教えです。魂の長い遍歴を経て、求道者法然房は救済者法然上人となったのです。その道程にはいつも、父親の「恨みを捨てよ。安らぎを求めよ」の遺言が心に刻まれて忘れることがなかった、と述べられています。法然上人の専修念仏の思想の原点に、父の遺言があったことは忘れてはならぬと思うのです。

25 母心大悲 (2012/5/1)

五月の第二日曜を「母の日」と決めたのはアメリカです。1910年、アンナ・ジャービスと

いう女性が母の死を悲しんで、亡き母の好きだったカーネーションを捧げたのが始まりだといわれています。

母の日がくると思い出すのは、サトウハチローさんの「おかあさん」という詩集です。落第3回、転校8回、勘当17回という暴れん坊の少年時代と放蕩の青春を送ったハチローを、優しく見守ってくれた母への追憶の詩集です。その中にこんな詩があります。

一番苦手なのは おふくろの涙です
なにもいわずに こっちを見ている涙です
その涙に灯りがゆれたりしていると
そして灯りが だんだんふくらんでくると
これが一番苦手です

母の涙。それは美しくも悲しく、どんな言葉にも勝るもの。それがハチロー少年を立ち直らせたのですね。

かつてテレビで「0歳からのメッセージ」というのを見ました。生後6ヶ月の赤ちゃんについて、母親と一緒にいる時と離れている時との体温の変化を測っているのです。母親が去って一人にされると、赤ちゃんの体温がどんどん下がります。そんな時の不安で悲しそうな赤ん坊の表情。母親が戻ってくると、また体温は上昇します。母親が離れただけで皮膚の温度が冷えるほど不安となる赤ちゃんの反応こそ、育児の重要さを訴えているのです。

「世に母性（はは）あるは幸いなり。世に父性（ちち）あるもまた幸いなり」
法句経に説かれた釈尊の言葉です。釈尊は生後7日目に生母マーヤ夫人と死別し、その後、母の妹であるマハー・パジャパティが養母となって釈尊を育てられました。生母と養母。二人の母の愛情に深く感謝されたからこそ、「この世に母がいるくらい幸せなことはない」と述べられているのです。

母の日制定より100年を経た今、時代とともに生活様式は変わっても、母と子の愛情に変わりがあるはずがないのです。

十億の人に十億の母あれど わが母にまさる母ありなむや （暁烏 敏）